木畑洋一著『イギリス帝国と帝国主義――比較と関係の視座』

（有志舎、2008 年）

古　矢　　旬

かつて神話学者ジョーゼフ・キャンベルは、さまざまな地域社会のさまざまな時代の神話に共通に現れてくるひとつのイメージについて語っている。「ワシとヘビとの戦い」のイメージである。「ヘビは土地に縛りつけられているが、ワシは精神的な飛翔である。こういう葛藤は私たちみんなが経験するのではないでしょうか。そしてその二つが合体したとき、すばらしいドラゴンが生まれます。翼を持ったヘビです」。[1)]

すべての人間が経験するとされるこの葛藤に、おそらくもっとも職業的に立ち向かうことを要求されているのは、歴史家であるといってよいであろう。彼（もしくは彼女）は一方で、複雑に入り組んだ過去の大小さまざまな事件や事象や問題の姿形を、残された史料の森の中に迷い込み、地を這うようにして探ることによって、個別に再現してゆかなければならない。と同時に歴史家は、その個別性の迷路から意識的に身を遠ざけ距離を置くことによって、個々の事象相互の関係を鳥瞰的、客観的に見通し、時代の全体的構図を明らかにすることをも求められている。

本書は、200 頁あまりのコンパクトな体裁ではありながら、この二重の課題をいくつかの重要な世界史的テーマに即して「ドラゴン」のように追究し続けてきた歴史家の足跡を示し、その方法論と独創的視点の展開を簡潔にまとめ、明らかにするとともに、現時点での史学的到達点の集成を試みた、きわめて重要な著作である。

本書の各章は、元はそれぞれ異なった機会に異なったプロジェクトのために書かれた論文であるが、本書のためにあらためて重複を削ぎ、加筆されたこともあり、イギリス帝国主義の成熟から衰退をめぐる著者の一貫した問題関心に沿って、周到かつ緊密に綯い合わされた統合的な一書をなす印象が強い。

その全体は、３部８章の構成をとっている。第Ⅰ部「帝国主義への視座」は、「9.11 事件」以後急速に台頭を見たいわゆる「アメリカ帝国論」の批判的検討を通して、著者独自の「世界史のなかの帝国・帝国主義」理解を提示する第１章と、著者の帝国理解においてもっとも独創的といってよい「帝国意識論」を概観した第２章とからなる。このいわば方法論的な２章における著者の主張の眼目は、「アメリカ帝国論」の多くに共通に見られる非歴史性という弊を克服するためには、現代世界を現代のみに視点を据えてみるのではなく、歴史的に見なければならないという点にある。すなわち現下の世界状況を全体的に理解するためには、冷戦後、とくに 21 世紀に入ってから顕著となったアメリカの軍事的・経済的・文化的な一極化という事実を挙げるだけでは決定的に不十分であると著者は主張する。著者によれば、そこで必要なことは、少なくとも世界史を 19 世紀中葉にまで遡

---

1) ジョーゼフ・キャンベル、ビル・モイヤーズ（飛田茂雄訳）『神話の力』（早川書房、1992 年）、85 頁。

り、イギリス帝国の完成、19 世紀末から第一次世界大戦に至るヨーロッパ帝国主義の高潮期、ついで２つの世界大戦による帝国主義諸国の動揺と帝国の解体期、そしてこの帝国の衰退過程と並行する脱植民地化に及ぶ長期一連の構造的な歴史変動の帰結として「現代」をとらえ直すことである。

こうした問題設定を受けて、続く第Ⅱ部「帝国主義の諸相」では、まず第３章において、ヴィクトリア女王の即位 50 周年と 60 周年を賀する二つの式典（ゴールデン・ジュビリーとダイヤモンド・ジュビリー）によって象徴される絶頂期のイギリス帝国の概貌が、植民地支配を裏打ちする「帝国意識」の昂揚、国民社会へのジンゴイズムの浸透といった側面に力点を置いて描かれる。

しかし、続く４、５章が明らかにするように、ダイヤモンド・ジュビリーの頃までには、イギリスのみならず、フランス、ドイツ、ロシアをはじめとするヨーロッパ大陸諸国も植民地の争奪戦に加わり、植民地化の波はアフリカと東アジアを洗い、世界史は明らかに「帝国主義世界体制」と呼びうる段階へと足を踏み入れていた。そして東アジアにおいてそのような地殻変動を促進した一因が、他ならぬ日本帝国の台頭であった。

第４章は、日清戦争と義和団事件と日露戦争を弾みとして日本が、イギリス主導下の帝国主義世界体制に新興帝国として参入してゆく過程を概観し、その過程で生じてきたヨーロッパ諸列強の対日批判と東アジア地域の対日警戒の高まりとに言及する。続く第５章では、この新しい「非西欧」「非白人」帝国の歴史的、地域的特色がイギリス帝国との比較を通して考察され、同盟で結ばれたこの二つの島国の帝国支配の構造と帝国意識が、世紀転換期から両大戦間期にいかなる変容を遂げてゆくかが描き出されてゆく。その際、著者の論述は、帝国側の植民地政策と植民地側の対応と抵抗という二つの観点の間を自在に往復しながら、また時に他の帝国主義国とその植民地との関係にも比較史的に目を配りながら、進められてゆく。こうして、帝国本国（中心）と植民地（周縁）との間の垂直的な支配被支配関係に着目して、日英をはじめとするいくつかの帝国主義列強の事例を比較検討することによって、著者は「帝国主義世界体制」の全体的構図を明らかにしてゆく。

第Ⅲ部では、「脱植民地化と帝国の残映」というタイトルが物語るように、著者の視点は、この世界体制の動揺から黄昏へと移行してゆき、ついには独立後の旧植民地諸国が生み出す新しい国際的秩序の可能性へと至る。第６章において著者は、この移行を促した最大の歴史的事件として、二つの世界大戦をとりあげ、それぞれが「帝国主義世界体制」に与えた打撃を、あらためて帝国と植民地の両側の状況に触れつつ明らかにしてゆく。

そして最後の２章では「脱植民地化」という世界史的な地殻変動の二つの帰結が語られ、近未来の世界への糸口が示される。第７章では、この変動が、イギリス帝国を連邦的国際組織たるコモンウェルスへと変えていった経緯が明らかにされ、ついでこの「帝国の残像」を背景とする「連邦」が、今後イギリスの国際的影響力の源泉となりうる可能性が検討されている。

最終第８章では、帝国の政治的支配がほとんど終了したにもかかわらず、なお「脱植民地化」が未完であるという現状が指摘されている。第一に植民地の独立という「政治的脱植民地化」は、必ずしも旧植民地の経済的従属や文化的・精神的な被支配という現実を払拭したわけではないからである。また第二に、帝国の実体が消滅した後も、かつての帝国の支配者と被支配者の両方に「帝国意識」の残滓が依然として色濃く認められるからであ

る。世界中の多くの旧植民地地域において、「脱植民地化」がまだ完了していないばかりか、かつての宗主国の国際意識には、なお帝国主義時代の文明観・人種観・歴史観が執拗に残り続けている。

著者によれば、このことはイギリスをはじめとするヨーロッパの旧宗主国についてだけいえるわけではない。とりわけアメリカと日本では、問題の所在自体が意識されていないだけに、その根はより深く、克服しがたいともいえる。アメリカの場合、自国の起源が通常「(イギリス) 帝国からの独立＝脱植民地化」に求められるため、20 世紀の「帝国主義世界体制」に一帝国主義国家として自らも加わった過去への無自覚、無批判を招きがちである。また日本の場合は、自らの帝国の解体と「脱植民地化」の全プロセスを敗戦後の戦勝国の権力行使に委ねることとなった結果、通常の「脱植民地化」過程で旧宗主国が経験する植民地民衆の抗議運動や民族独立運動との対決にともなう国民的痛苦をおおかたのところ経験せずに済ますこととなった。このいわば他からの強制による受動的な「脱帝国化」は、過去の植民地支配が現地の人民にもたらした犠牲をめぐる日本と日本人の罪責感の欠落をもたらし、現在に至るまで、日本が東アジアにおいて国際的信頼を勝ち得ていない根本的理由となっていると著者は指摘する。

以上の概要からも知られるように、本書は「イギリス帝国」という未曾有の広大な地域に支配を及ぼした政治体の形成・発展・衰退・解体の過程を歴史的に辿り、それぞれの段階でこの帝国が人類史の全体に及ぼしたインパクトを順をおって明らかにし、最後には世界がかつてそのような「帝国」をもったという事実が、現代になお残している影響のいかんを問おうとするものである。したがって直接間接に本書の論述がカヴァーする時代は、19 世紀から 21 世紀に及び、空間はイギリス帝国が最盛期に獲得した「世界性」を反映して文字通り地球大に及ぶ。このような巨大な主題をきわめて限られたスペースの中で扱いながら、本書は平凡な概説にも退屈な通史にも堕することがない。その一つの理由が、達意平明でありながら生彩に富む著者の文体にあることは疑いない。しかし、本書の歴史書としての魅力は、それ以上に歴史のダイナミズムを的確にとらえるためのいくつかの方法論的な工夫によって生み出されているように思われる。

その意味で、本書の第一の特長は、イギリス帝国史の全体像を理解するための鍵となる語句、概念が、一貫してぶれのない定義を与えられた上で、叙述の流れの中に適切に配されている点にある。人は優れた歴史書を読むとき、適切な場面で用いられた適切なキーワードやキーフレーズによって、あたかも自らの歴史理解を妨げていたデッドロックが一瞬にして開かれ、未知の歴史的世界が広いパースペクティヴをもって鮮やかに立ち現れてくるかのような感を抱くものである。本書には、そのような意味で文脈示唆的あるいは文脈創造的な鍵概念が随所にちりばめられている。

そうした鍵概念のうちもっとも重要なものが、第 2 章全体をその解明に当てている「帝国意識」であることは間違いない。それは、「自らが、世界政治の中で力をもち、地球上の他民族に対して強力な支配権をふるい影響力を及ぼしている国、すなわち帝国の『中心』国に属しているという意識である」(38 頁) と、名著『支配の代償』[2]からの引用によ

---

[2] 木畑洋一『支配の代償―英帝国の崩壊と「帝国意識」』(東京大学出版会、1987 年)。

って簡潔に定義されている。その上で、その具体的な内容として「民族・人種差別意識」「大国主義的ナショナリズム」「文明論的優越主義」（とそこに発する「文明化の使命」感）などの要素が抽出され提示される。こうした諸要素からなる「帝国意識」は、いったん形成されるや帝国の統治システムや構造の盛衰とは、ある程度独立に消長する。そして、さまざまな宣伝やメディアの装置をとおして、帝国主義本国のエリート層から大衆へと広がってゆくばかりか、被支配地域の現地エリート層や、はてはその民衆にまで浸透し、植民地の独立にとって大きな障害をなすこともある。そればかりでない。この「帝国意識」は、イギリス以外のどの帝国主義国－植民地関係にも付きまとう現象であり、したがってこれに注目することによって、「帝国主義世界体制」の広がりと強度と持続性を測り、比較することも可能となる。

同様な文脈発見的なキーワードとしては、「帝国の総力戦」が挙げられる。当初ヨーロッパに勃発した戦争が、海を越えて広がり「世界大戦」に発展したこと自体が、帝国主義体制の性格の反映であったという指摘に加え、著者はこの二度にわたる世界大戦では、いずれの場合も、被支配地域の資源も人間も支配地域のそれらと同様に動員されたという意味で「帝国の総力戦」であったという。著者によれば、このキーワードは戦後の「脱植民地化」という歴史の転換点を理解する上でも重要である。「帝国主義列強が支配領域のさらなる拡大をねらって争う状況自体が、その支配力を突き崩していく力、すなわち被支配の位置からの脱却をめざす民族運動、独立運動の力をはぐくんでいった」（本書163頁）からである。そしてこのキーワードは、「帝国の階層構造」というもう一つのキーワードと併置されたとき、たとえば第二次世界大戦の連合国側からの「反ファシズム戦争」という規定が一面的であり、連合国の植民地支配の実態をいかにも隠蔽するかのように働いてきたという事実に光をあてることとなる。

これら以外にも、（委任統治体制の帝国主義的性格を言い当てる）「隠された併合」、（脱植民地化以後もイギリスの国際行動を縛る）「帝国の残像」、（国王の国民統合機能の象徴化としての）「ロイヤル・ツアー」など、一語をもって広い歴史的背景を鮮明に思い起こさせるキーワードやキーフレーズが本書に生彩を加え、同時にテーマと叙述の一貫性を支えている。

さて、本書を貫く第二の方法論的特長は、視座の採り方の多様性、柔軟性にある。そこにはむろん「帝国」という政治体の重層的構成、多元的編成が反映している面もあろうが、「帝国意識」についてすでに見たように、著者の比較の視座は、イギリス本国とインド、アイルランドという「半」植民地的存在、イギリス植民地体制とフランスのそれ、日英比較、脱植民地化における東アジアとアフリカとインドの比較、イギリス帝国と英連邦とコモンウェルスと、論旨の展開にしたがって自在に移動していく。こうして世界性と地域性との両側から「帝国主義世界体制」の実相が具体的に明らかにされてゆくのである。

第三に、冒頭で述べたような二つの視点の間に巧みな均衡が計られている点である。読者は、第Ⅱ、Ⅲ部にちりばめられた幾多の事件や人物をめぐる生き生きとしたエピソードの数々を読み進めるうちに、いつの間にか世紀単位の歴史的大変動の渦中に引き込まれてゆくのである。このようなダイナミックで統合的な著述を可能にするためには、一方において広範な史料の博捜と歴史の細部をおろそかにしない史料的実証の積み重ねが必要なことはいうまでもないが、他方でそれと並行して、個別の細部の相互連関の探求を通して時

代の全体的構造をとらえるための理論化作業を繰り返すことも不可欠であろう。その意味で、本書は『支配の代償』以来20年以上にわたり著者が積み重ねてきた実証と理論化の結晶であるといってよい。

以上見てきたように、本書は内容の面からも方法の面からも、ただにイギリス史の専門家だけではなく、広く世界史、現代史の研究者に裨益するところきわめて大きい好著である。アメリカ現代史研究に従事する評者にとっても、とりわけ19世紀後半以降の半世紀間のアメリカの対外関係を、イギリスを中心とする「帝国主義世界体制」のうちに位置づけて見直そうとうする本書の試みはきわめて刺激的であり、近年注目を浴びる「アメリカ史の国際化」「世界史の中のアメリカ史」といった学問的動向にさらに弾みをつける成果であるといってよい。

とはいえ、本来が論文集であるという本書の性格からも、また少ない紙幅に地球史的なテーマを盛ったという限界からも、とくにイギリス史を専門とはしない他地域の歴史研究者からは、著者に問いたい点も少なくないものと推量される。そこで最後に評者も、本書に対して、いくつかの問題提起を行うことで責めをふさぐこととしたい。

アメリカ現代史に従事するものとして、まず問いたいことは、「現代世界」をどう見るかという点に関わる。最終の第8章のタイトル「未完の脱植民地化」がいみじくも暗示するように、著者は、現代世界をイギリス帝国の延長線上にとらえ、それが「帝国主義時代」の終焉（=「脱植民地化」）の最終段階にあると理解している。他方で著者は第1章において、現在の自身が「経済グローバリズムを推進する多国籍資本のもとで、強国の権力行使が頻繁にみられるという現状認識」（28頁）に立っていることを認めている。しかし本書は、この二筋の現代世界理解を交錯させるところには踏み込んでいない。ここに残された問題は、1970年代以降つまり「帝国主義世界体制」崩壊以後に現れたグローバリズムが、「脱植民地化」という前代からの未決の課題といかに関連しているのかという点にある。未完の脱植民地化と現下のグローバル化との歴史的連関をかつてのイギリス帝国支配下の諸地域の現状に照らして理解することは、現代史学にとってもっとも枢要な課題であるように思われる。

第二に、現代（とりわけ21世紀に入って後）のアメリカの世界支配を「帝国」ではなく、むしろ「ヘゲモン」と規定するべきであるという著者の立場（29頁）は、「帝国」「帝国主義」を19世紀中葉から第二次世界大戦までの時代性の刻印を帯びた歴史用語として用いるという著者の厳密な学問的立場から一応は首肯できる。しかし、アメリカ史の文脈で考えたとき、本書にいう（いわば認識象徴としての）「帝国主義」とはまったく異なった意味で、（組織象徴として）アメリカを「帝国」と呼びならわす政治的伝統がアメリカにあったこともまた事実であろう。たとえばジェファソンのいう「自由の帝国」は、本書にいう「帝国主義」とは（あったとしても）きわめて希薄な関係しかないものの、アメリカ人独自の「帝国意識」として無視しえないのではないだろうか。「9.11事件」以後、雨後の筍のように現出した「アメリカ帝国論」の多くは、レーニンではなくジェファソンの伝統との関連で「帝国」に言及したものではないだろうか。冷戦以後のアメリカの世界支配について、著者はいう。「それ［現在の世界］は、帝国主義という概念でも帝国という概念でも説明できない新しい様相を提示している世界である」（29頁）と。しかし、はた

してその新しさの中に、著者のいう帝国主義の一世紀前に言及された「アメリカ＝自由の帝国」の思想的伝統の反映はないであろうか。ことは、言葉の厳密さ以上に、思想の内実にかかっているように思われる。

第三に、これも現代の世界像に関わる問題であるが、著者の論点は「帝国主義世界体制」崩壊以後の「脱植民地化」、国家独立というフェーズに集中するあまり、帝国意識からの脱却の過程で、とりわけ植民地の内側に生ずる民族意識の多面的な実相が（少なくとも本書の限りでは）閑却されているかの印象がある。著者のいう「精神の脱植民地化」は、一元的な国民意識を生み出すよりは、しばしば多元的な民族意識や民族的伝統の「（再）創造」を伴ったのであり、それゆえ「脱植民地化」の過程は、少なからぬケースで新独立国内の民族間対立や内戦をすら伴う結果となったのではないだろうか。

むろんこれらは、おおかたのところ本書の扱う問題領域を外れるものであり、望蜀の感を免れない疑問や問題提起に過ぎない。むしろそれらは、本書が与えてくれる豊かな歴史的見取り図にしたがって、今後世界史の各分野で追究されてゆくべき問題であろう。